ペルガモンのアスクレピエイオン（2）

―― Aelius Aristides の治療記録 ――

山　川　廣　司

3．アリスティデスの経歴について

ペルガモンのアスクレピエイオンで行われていた治療について最も豊かな情報を提供してくれるのが、ローマ帝政期の著作家アリスティデスAristides, Publius Aelius（AD117～181年）である。本稿では、彼の著作『聖なる教え *Hieroi Logoi（The Sacred Tales)*』[1)] を中心にアスクレピオスの治療祭儀について見ていくことになるが、ここで簡単に彼の経歴についてみておく。

アリスティデス[2)] は富裕な地主の息子として小アジア・ミシュア地方のハドリアノセラエHadrianotheraeに生まれた。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの教師でもあったコティアエウムCotiaeumの人アレクサンドロスAlexandrosに師事し、さらにアテナイとペルガモンで学んだ。十分な学業を積んだ後、彼はエジプト、ギリシア、イタリアなどを巡るに旅をした。訪問地では彼の才能と教養の故にその名声が高まり、いくつかの都市では彼の記念碑が建立されたという。アリスティデスはローマ訪問中で故国への帰国直前に、この後13年余の間彼を苦しめることになる病気[3)] に初めて罹った。その時彼は26歳の若さであったが、その病は将来を嘱望され、偉大な弁論家としてのキャリアを目指していた彼の希望の芽を過酷にも摘み取るものであった。

医神アスクレピオスによる夢見の治療で有名なペルガモンのアスクレピエイオンAsclepieionで、患者として多くの時間を過ごすことを余儀なくされた彼

は、生涯の後半を主に小アジアで過ごし、スミュルナSmyrnaに家を構え、病気の合間に自ら著述と講義を行ったといわれている。また彼はイオニアで知己を得たローマ皇帝マルクス・アウレリウス帝Marcus Aurelius Antoninus（121－180年）に大きな影響を与え、178年に起った大地震でスミュルナが壊滅的な被害を受けた際も皇帝にその都市や住民の惨状を直接伝え、その再建に莫大な支援を受けることができた。彼の活動に対して、スミュルナの人々はアゴラに青銅の彫像の建立など感謝の献納を申し出たが、彼はアスクレピオスの神官職を終身引き受けた以外は、すべての申し出を断ったという清廉の士でもあった。

古典期の文学伝統に基づく豊富な知識と才能を有するアリスティデスは、多方面にわたる文学作品を産み出したことから若くして巨匠と称賛され、その後も大いなる人気を博してヘレニズム期の文学伝播において中心的役割を果たしたと評価されている。彼の作品としては、公的、私的祭典で語られた演説、歴史をテーマとした朗読、論争的な評論（随筆）、諸々の神々への散文による讃歌、６巻本の『聖なる教え』等が挙げられる。特に『聖なる教え』は、彼の著作のなかでも特異な部類に属する。それは病気とその恢復について一種の日記の形で語られている。夢見の中でアリスティデスになされた医神アスクレピオスの啓示や指示への彼の服従の記録は、聖域での治療（医学）とそれに関係する実践の証拠としても、また彼の個人的、宗教的経験についての本人自らの直接の報告としても、非常に重要な意義をもつものであった。さらに現在は、その美しい文章で綴られた名文であるという評価よりも、ローマ帝政初期当時の小アジアの社会や宗教を知る貴重な資料として高く評価されている。

４．『聖なる教え　*Hieroi Logoi*』について

本書は紀元170～171年の冬の間にアリスティデスが隠居していた所領ラネイオンLaneionの片田舎で制作されたようである。第６巻の大半はすでに散逸し断片的であるが、それは本書を完成させる前に亡くなったからだとされる。また本書は、アリスティデスの伝記というよりは過去におけるアスクレピオスに

よる治療の効験の証拠の書であり、かつ将来への沈黙の祈りであるとされている。日記の形式を採り入れた点が本書の特徴であるが、彼とアスクレピオスとの関係は密接である点も注目される。アスクレピオスが夢見のなかで直接的、間接的に彼の健康回復を手助けしたこと、同時に彼の弁論家としての経歴を高める際に施した処置を記憶し、それを書き記している[4)]。それ故、本書でアリスティデスは、アスクレピオスの聖域の内外で行われた奇跡による身体治療に際して神の恩寵を受けた体験と当時の教養あるエリートたちの教育とを関連させ、病気についての叙述と弁論術の研鑽という２点を中心に論述している[5)]。本稿では、ペルガモンを中心とした聖域アスクレピエイオンや関連する近隣地域でのアスクレピオスによる病気治療についてアリスティデスの記述を中心にみることになる。

ここで本書を翻訳したベール C.A.Behr の区分に基づき、その内容を提示する[6)]。

第１話

序言　（１～４）

日記と関連事項　（５～60）

腫れた腫瘍　（61～68）

ゾシモスZosimusの死　（69～77）

フィルメヌスPhilumeneの治療（78）

第２話

序言　（１～４）

崇拝祭儀についての紹介　（５～10）

その時期の夢　（11～23）

庇護の夢　　（24～36）

疫病　　（37～45）

川での水浴　　（45～59）

ローマへの旅　（60～70）

アスクレピオス神殿での水浴　（71～80）

エフェソスへの旅　(81～82)
第３話
アッリアノイAllianoiへの旅　（１～６）
レベドスLebedosへの旅　（７～14）
後弓反張（opisthotomus）の発作と他の恐ろしい徴候　(15～20)
薬剤と食事療法　(21～37)
地震　(38～43)
犠牲　(44～46)
ゾシモスの死とエジプトの神々　(47～50)
第４話
エセポスAesepusへの旅　(1～13)
弁論術研究のための帰還　(14～30)
抒情詩　(31～47)
啓示を与える夢　(48～70)
恩恵による救済の勝利　(71～108)
第５話
ゼウス神殿への旅　(1～10)
キュジコスへの最初の旅　(11～17)
ペルガモン、スミュルナ、エフェソスへの旅　(18～37)
スミュルナでの弁論開陳　(38～41)
キュジコスへの第２回目の旅と帰還　(42～55)
偉大なる夢　(56～67)
第６話
未完

以下では、医学的見地から見れば不正確あるいは誤解などあるかも知れないが、『聖なる教え』第２書からアスクレピオスによるアリスティデス治療について、彼の記述に従って、時期的にまとめながらその概要をみてみたい。

5.『聖なる教え』にみられる治療の記録

⑴　ローマへの旅と病に倒れ、小アジアへの帰還の旅

AD144年１月：　（60）恐らくその大病の発端が何であったかについて知りたいと思う人はいるだろう。それはアルキノオス王に語られた物語（*Od.*,Ⅷ～Ⅻ）と同じ位あるいはそれ以上に興味を引かれるが、何とか簡潔に語りたいと思う。私は温泉と冷泉による治療の結果、当初から病気だったにも関わらず、冬の最中にローマに向けて出発した。私は病気のことは気にも留めず、私の体

図１　小アジア地図（出典：A.J.Festugière, *DISCOURS SACRÉS,* p.10）

がもっている抵抗力と日頃の幸運を信じていた。ヘレスポントHellespontに到着すると、私は耳の不調で大層苦しんだ。それ以外でも私の体調は正常な状態とはいえなかったが、少し持ち直したので旅を続けた。(61) この後、私は雨、霜、雹、さらにあらゆる類の風に見舞われた。今やヘブロス川は激流となったが、小舟で何とか渡れた。もしそうでなくても、そこは一面固い氷の大地で、見渡す限り湿地帯であった。宿屋はなく、戸外の空からよりも屋根を通してたくさんの雨が入ってきた。この間ずっと、天候不順は季節の移ろいや私の身体の抵抗力とは反対に迅速にかつ急であった。(62) これら全てが原因で病気が悪化した。私は歯が抜けることを心配して、その時は歯を捕えるよういつも手を上に挙げていた。そしてミルク以外の食物の摂取を完全にやめた。すると私は最初に胸の呼吸不足に気付いた。私は高熱を発し、他の名状し難い病気に罹った。そしてエデッサEdessa[7] では滝の傍で寝て、家を出発してから100日目にやっとのことでローマに到着した。

AD144年春：　その後直ぐに私の腸が腫れ上がり、寒気で震え、悪寒が体中にまわり、呼吸障害に陥った。(63) そこで医師団は下剤を調合し、私は最終的に血の混じった排泄物が出るまで２日間エラテリウム（Elaterium, 峻下剤薬）を飲むことで腸の浄化を図った。私は発熱し、全てが絶望的となり、生きる希望さえなくした。遂に医師団は私の胸を手始めに膀胱に至るまで全面的に切開した。そして吸角器具（吸玉）を宛てると私の呼吸は完全に止まり、気が遠くなるような、耐えられない痛みが体中を突き通り、全てのものが血液で汚され、私はかなり乱暴に浄化された。私の腸は冷たくなり、外に曝け出され、呼吸困難も強まってきたと感じた。(64) そして私はどうしてよいか分からなかった。というのは、食事をしたり話したりしている最中に阻止現象が現れ、私は窒息するに違いないと思った。私の他の身体的弱質もこれらと一致しており、テリアカ（アンティドテス）[8] や他の種々の薬が投与されたが効き目がなかった。

AD144年秋：　医師団はもし私が何とか耐えることができるなら、帰宅できるようにしようとしたらしい。しかし私の体は振動に耐えられなかったので、

陸路での帰宅は不可能であった。そこで私たちは船での航行を試みた。(65)『オデュッセイア』のような場面が起きた。初めはティレニア海[9)]で突風（スコール）と暗闇、南西の暴風が起り、海上は制御不能なほど激烈に荒れた。舵手は舵を手放してしまい万事休す、船長や水夫たちは頭に灰を振りまき、自らと船の行く末を思い歎き悲しんだ。海は船首や船尾に猛威を振るって突進した。そして昼夜を舎かず吹き付ける風と波で私はずぶ濡れだった。(66) 私たちがシチリア島のペロルムPelorum岬に運ばれたのは、ほぼ真夜中だった。それから行きつ戻りつ彷徨いながら海峡に流れ込んだ。私たちは潮流によって静かに護衛され、ほぼ２昼夜でアドリア海を横断した。ケファレニアCephalleniaに入港する時、再び波が高くなり、風は順風でなくなり、あちこち彷徨った。私の身体は種々の箇所で苦痛があり、衰弱していた。

AD144年9月22日： (67) あなた方は、正に彼岸の中日に、アカイア海峡[10)]で再び何が起ったかに口を差し挟むことはできない。私は最初からそのことが気に入らず反対していたが、その時、有能な水夫たちがパトラから別の船で出航した。私の胸やその他の身体の部分は依然罹病していた。(68) エーゲ海で起った出来事もほぼ同じことであり、舵手や水夫たちの無能さによって引き起こされたものであった。彼らは逆風で航海を決断し、私の意見に耳を傾けようとはしなかった。再び14昼夜の間暴風雨に遭い、海の隅々までの漂流を切り抜けながら航行したが、その間ずっと絶食状態であった。

AD144年10月： 辛うじて私たちはミレトスに入港した。そして私は立ち上がることも出来ず、私の両耳は全く聞こえなくなっており、あらゆるものが私を苦しめた。急いで旅を再開し、かくして私たちは予想外にもスミュルナに到着した。

AD144年11月： (69) すでに冬が到来していた。私の口蓋部もさらに身体の他の部位も非常に深刻な情況だった。医師たちや身体療法士たちが集まり、私を救済することも、多種多様な私の病気を認知することも出来ないとした。彼らはこの町の気候に私が耐えられないので、温泉地に転移させることに諸手を挙げて同意した。この後のことは少し前に叙述した[11)]。(70) 簡潔にかつ曖昧

に言えば、そのような多様な原因から私の病気が発症して増大し、時間の経過と共に進行していったのである。

AD145年夏頃：　１年数ヶ月が過ぎ、私はペルガモンのカテドラCathedra[12)] にやって来た。

アリスティデスが病気を押してローマに向けて故郷を出発したのが144年１月の冬の最中、ヘレスポント（ダーダネルス海峡）を渡り、トラキア、マケドニアを通るエグナティア街道を通って100日をかけてローマに到着した。旅には不向きな寒さ厳しい季節は健常者でも苦痛の旅で、罹病者にとってその苦痛は如何許りか容易に想像できるであろう。何故この様な最悪の時期に旅をしなければならなかったのだろうか。またローマに到着した春に腸の病気から呼吸困難に陥り、医師団の手当を受けるが容態は芳しくなく、秋に船を使用しての帰国となる。しかしこれも暴風雨に襲われて漂流したり、船員とのトラブルなどの難問に加え、体調も思わしくなかった。それでもティレニア海からメッシナ海峡を通り、イオニア海、エーゲ海を航行して、10月にはミレトスに帰港し、最終的にスミュルナに帰還した。しかしその年の冬季間、たくさんの病いを抱えたアリスティデスの治療に当たっていた医師団や身体療法士たちは臨床治療に匙を投げ、温泉地での転地治療を勧め、翌年145年夏にペルガモンに旅することになった。以上が将来を嘱望された弁論家としての夢破れ、以後13年半に亘る種々の病気との戦いに臨むに至った経緯である。道路網が整っていたローマ帝国内とはいえ、病いを抱えて移動＝旅することが如何に困難と苦痛を伴うものであったかが実感できる。

⑵　アリスティデスがアスクレピオスの寵愛を受けるに至った経過

AD144年10月：　(5) 病気を押してのローマ旅行の無理が祟り、多くのいろいろな疾病を患ってイタリアから帰還した後、医師たちは治療方法だけではなく、病気そのものの認知にも大変困惑した。(6) 最も堪え難く困難なことは呼吸の途絶が引き起こされることで、辛うじて耳障りで浅い呼吸をし、喉の絶え

ざる収縮や震えの発作があり、我慢する以上に援護される必要があった。(7) そこで私の体調もよく、気候に耐えられるなら、温泉を利用する治療が最善となったが、すでに冬到来のため、町の近場での治療となった。

AD144年12月頃： ここで最初に救済者（アスクレピオス）がその啓示を顕わし始めた。神は私に裸足で外に出るように命じた。そして私は夢の中での命令が成し遂げられると、恰も起きている状態のように、夢の中で「アスクレピオスは偉大なり！その命令は成就された」と大声で叫んだように思われると同時に戸外に出た。

AD144年12月頃： (50) さらに冬が始まった時、スミュルナでの別の水浴が命ぜられた。温泉地に旅しなければならなかったが、治療は温泉ではなく、傍を流れている川を利用しなければならなかった。終日湿っぽくて寒かった。水の温度が低く、浅瀬を渡れなかった。そしてこれが最初の奇跡であった。午後遅くなって水浴が行われたが、強い北風が吹いていた。

AD145年夏： この後招聘があり、幸運にもスミュルナからペルガモンへの旅が実現した。(8) 次に何が起きるかを語ることは人知の及ぶところではない。それでも私は話そうと思っているので、大雑把なやり方ではあるが、そのいくつかを列挙したい。もし私たちに起きた神の業を正確に知りたいと欲するなら、その者は羊皮紙の書や夢そのものを捜し出すべきである。彼はあらゆる種類の治療の書、いくつもの演説文、本格的な弁論集、種々の見解、すべての予言やあらゆる類の事柄に関する神託、いくつもの散文体・韻文体の書、期待する以上に偉大な神への感謝の念に値する全ての書などを捜し出すだろう。(9) 最初の夜に神殿に入ると、神がコンスルの１人であったサルビオス Salvius[13] の姿で私の養父のところに現れた。その時は、私たちはまだサルビオスが誰であるかは知らず、神はその時偶々彼を宛てたのだった。神が私の義父に『聖なる教え』の名前で示される私の演説文やその他の作品に関して語ったと言っており、私もそう思っている。これに関しては以上である。(10) 私の記憶ではこの後、神は私に薬を処方したが、その最初がバルサン（balsam, 芳香性含油樹脂:薬用・香膏）の樹液であり、それはペルガモンのテレスフォ

ロスTelesphorus[14] からの贈物だと言った。私は温水から冷水になる間の入浴にそれを使用し、次にレーズンや他のものを混ぜた石鹸を使用し、その後で数えきれないほど大量の薬を使用しなければならなかった。

ローマから帰還後の144年12月頃から、アスクレピオスがアリスティデスに顕現するようになり、医師団が放棄した治療が始まる。それは主としてアスクレピオスが命じる薬剤の投与と水浴と瀉下で、水浴治療は聖域内の泉・井戸のみならず、近郊その他の河川、海にも出かけて行われた。最初にスミュルナの温泉地の川での水浴が命ぜられた。そして145年夏頃にペルガモンを訪れたが、治療の記録は146年３月から始まる。まずアスクレピエイオンでの最初の夜の夢見で、当時のコンスルの姿で義父に現れたという。必ずしも知人でない人物が直接本人にではなく、義父に啓示のため現れた。夢見でなぜ直接本人に神の意向を伝えないのか理由はわからない。

⑶　ペルガモンでの治療—水浴と泥浴—

AD145／146年の冬：　(51) これらのことは冬に再びペルガモンでも行った。私の体は驚くほど衰弱し、そこで私は長い間、寝ている部屋を離れることが全くできなかった。神は私に町を通って流れている川で水浴するよう命じたが、丁度雨期で水かさが高かった。神は水浴が３回あることを予言した。友人たちの中で最も真剣に私のことを考えている人たちがこの命令を知った時、私を護衛するために、また何が起きるかについての彼らの関心から集まって来た。というのは、他人の報告を聞く代わりに、同時に自分の目で直接この出来事を見たいと欲したからである。実際その日は嵐だった。(52) 旅の間中、雨降りだった。これが第１回目の水浴であった。町によって汚されていない穢れのない清水を見つけたいという私たちの希望で、ヒッポンHipponへの道に沿って進んだ。私たちは土手に到着したが、友人の誰もが私を勇気づける気力はなかった。神殿管理人自身や哲学者、貴族の何人かがその場に居合わせたが、彼らは大いに悩み苦悶していているようだった。私は外衣を脱ぎ、神の名を呼びなが

ら川の真ん中に飛び込んだ。(53) その中は岩が波で洗われ、木材が流れに運び去られ、波が恰も風から立ち上がったようだった。そして川床には何も見えず、大きな怒号が響いた。ここでは葉っぱの代わりに岩が旋回していたが、流れている水は澄んだ流れよりもっと瓦礫等の汚れがなかった。私は出来るだけ長くぐずぐずして水の中にいた。私が川から上がり土手に現れると、暖気が私の体全体を通り抜け、たくさんの湯気が沸き立ち、私の肌全体が紅潮していた。私たちは神への感謝の讃歌を歌った。私たちが戻ると再び雨になり、こうして３回目の水浴は終わった。

AD145／146年冬： (54) もう１つの水浴がここエラエアElaea[15] で行われた。神は海で水浴するように私をそこへ送ったのだ。神は船アスクレピオス号が港の入口で碇を降ろしており、そこで私が自らを投入することになっていると予言した。私は幾人かの水夫の叫び声やその他のことなど全てを次々に思い出すことができないが、白昼に何が起ったかは承知している。私たちがエラエアに着いた時は港の外にいたが、直ぐにアスクレピオスの名前がついた船を見つけた。水夫たちは何が起ったかをみて、直ちにその神の名を大声で叫んだ。北風が激しく吹き荒れ、そこで私が海から現れた時は覆うものが必要だった。(55) 翌日の夜、神が再び私に同じやり方で海を使用しての水浴を命じた。私が水から上がると風の前に立つように、そしてこのようにして私の体を治療するよう命じた。

私は上記のことが多くの人々にも処方されていることを知っている。先ず第１に、神は時々あるいは頻繁に神力や神意を示したのである。第２に私たちの通常の状態を考えたなら、本来神の活動はむしろ驚嘆すべきものであろう。(56) その時私たちがどのような状態にいるかを誰が理解できるか。それぞれの出来事に居合わせた人々は、私が外面的にも内面的にもどうだったか知っている。昼夜にわたりどれくらい長時間、私の頭からの流液や胸の動揺が続いたか、私の呼吸が上述の流液とどのように闘い、私の喉にひっかかり、炎症を起こしたか、私の死に対する思いが非常に大きかったので召使いを呼びにやる気力さえなかったが、私は呼んだとしても無駄だったと思っているか等々。と

いうのは、事が起る前に全てが終わっているからである。(57) さらに加えて、私には歯や耳へのいろいろな徴候や私の動脈の至る所での緊張、栄養状態を維持できないこと、嘔吐すら出来ないことなどの徴候があった。というのは、どんな食べ物の小片も私の喉や口蓋に触れると気管支を閉ざしたので、それを回復するのは不可能であった。激しい苦痛が起こり、それが私の脳に入り、あらゆる種類の攻撃を仕掛け、そして夜横になるのも不可能にした。私は体を起こしておかなければならず、頭を膝に付け、前屈みで我慢した。(58) 思うに、このことでまた他の諸々のことで、次に私は羊毛やその他の覆い物に包まれる必要が起った。全てが閉ざされた状態でしっかり閉じ込められていたので、昼も夜も同じで、昼間の代わりに夜が眠れなかった。死すべき人間はこれら全てのことを何と語るのか。

AD146年３月22日： (71) さて（話が脱線したので）神による水浴に話題を戻そう。苦痛や病気、全ての危険は忘れよう。私はある夢見に従って、アスクレピオス神殿の扉と格子のある門の間で横になっていた。神が「夕方になると草色の水（活力）[16] の泉の傍が賑わう」という詩句を神託として私に授けた。そこで私は、その神殿の聖域内の屋外で自分に油を塗り、「聖なる井戸」で水浴した。自分が目撃したことを信じる者は誰もいなかった。(72) そして神が私に合図を送って私の摂生療法を変えた時、私自身が自分のやり方で処置するつもりでいることを除いて、神は私をあらゆる病気から救った。だが「仲間の邪悪な忠告が私を説き伏せた」(*Od*.,X,45)。彼らは賢者を装い、それらについて確かな賢さを持っているかのように装い、むしろ不自然に私の夢を説明し、それと同じことを守らなければならないと神が明示していると言った。不承不承、疑いながらも、また私自身がもっと多くを知っていると信じながらも、彼らが自分のことしか信用しない人とは思えなかったためにそれを認めたが、経験からして、私が正しいことはわかっていた。(73) 私の忠告者たちがどんな間違いをしても、放っておこう。これらにも神が強く関与しているように思える。というのは神が命じ、はっきりとそれらを述べる時は何時でも、同じ摂生療法や同様のことが私の心身に、救済や体力、安楽、安逸、意気軒昂な精神

やあらゆる幸運などをもたらした。しかし他の人が私に忠告し、神の意志を間違った時は、全てがこれとは反対のことを招来するのだ。

AD146年３月22日：　もう一度神の命令を思い出してみよう。(74) 人々が神アスクレピオスを讃えて、自らの体に泥を塗るのが春分の日であった。しかし神が私に合図を送らなければ、私は自ら動くことができなかった。それ故私は躊躇したのだ。はっきり覚えているが、その日は非常に暖かかった。ところがそれほど日が経たないで嵐が起き、北風が空全体を掻き混ぜた。黒雲の列が一団となり、再び冬の気候に逆戻りした。この様な状況下で、神は私に「聖なる井戸」で泥を体に塗り、水浴するよう命じた。そんな時でも、私は驚くべき光景を提供した。泥と空気の冷たさは凄まじかったので、私は自分で「井戸」に走り寄れるのが幸運と思った。そして「井戸」の水は他の暖気の代わりに私には十分暖かかった。以上が最初に起った奇跡の一部である。

(75) 翌日の夜、神は再び私に同じ方法で泥を塗り、神殿の周りを環状に３周走るように命じた。北風の強さは筆舌し難いものであり、氷のような寒さは増々強まった。体を覆うのに適した厚地の衣服が見つけられず、風は突き抜け、槍のように私の横腹に打ち付けた。(76) 私の友人の何人かは私を慰めたいと思っていたようだが、私はそれを望まず、危険に立ち向かい、自分を手本にしようと決意した。私は自らに泥を塗り、北風が勝手に私に打ち付けるままに神殿の周りを走った。最後に「井戸」に行き、水浴をした。仲間のうちの１人は直ぐに尻込みし、１人は痙攣に襲われ、素早く浴場に連行され、何とか温められた。この後、私たちは春の日のような１日を過ごした。

AD146年３月末：　私が記憶している１つの出来事がかつて神によってなされた。(26) 神は私が２日のうちに死ぬ運命にあり、これは避けられないと言った。そして同時に神は私に、翌日のある出来事の前兆や天候の状態、馭者の一団がどこに現れるかなどを示した。また神は真実についての他の前兆も私に授けた。(27) 神は以下のことを行わなければならないと言った。先ずは私が荷馬車に乗って町を貫流する川岸に行き、町の外にある場所に着いたら「溝」で犠牲を行うよう命じた。溝を掘り、そこで犠牲を行うことが何れの

神に対しても必要であった。次に、僅かなコインを手に持って川を渡って戻る時にそれらを投げ捨てた。思うに、神はこれに加えて他に幾つかのことも命じた。この後、神殿に行き、アスクレピオスに正規の犠牲を行い、また聖なる大杯を捧げ、私の巡礼者仲間全てに犠牲の聖なる分け前を配分するよう命じた。また体全体の健康のために、私の身体のある部分を切除する必要があったが、これは困難だったので、神はそれを取り止め、代わりに私が付けていた指輪を外して、テレスフォロスにそれを捧げるように命じた。というのは、これは私の指を切除するのと同じような効能をもっていたからである。そして指輪の帯に「クロノスの息子」と刻印するよう命じた。これを実行すれば私は救われるだろうと。(28) この後、私たちの情況を想像することも、神が再び私たちをどのような類の調和に至らしめるか推測することも出来なかった。というのは、私たちは恐れと共に大きな希望もあったので、恰も秘儀伝授におけるようにこれらのこと全てに携わったからである。

AD146/147年の冬： (77) 再び氷と最寒の風を伴った冬の気候となったが、神は私に泥を取って自分に浴びせ、神の中では至高かつ最強の神であるゼウスの名を唱えながら「聖なる体育場Sacred Gymnasium」の中庭に坐るよう命じた。これもまた衆人環視の下で行われたのである。

(78) 言われていたことと同じような奇跡を引き起こすこともあった。というのは40日以上に亘り、いくつかの港もまたペルガモンから下って行ったエラエア沿岸部全体も凍り付いていたが、その時神は私に小さな亜麻布の外衣だけで他には何も着ないで、我慢してベッドから出て、外の泉で体を洗い浄めるよう命じた。(79) 泉の水の所に辿り着くまではつらかった。全ての物が氷の塊で、水の流れは直ぐに凍り、氷の管のようであった。どんなお湯でも注げば即座に凍った。にもかかわらず私たちは泉に近づいたが、亜麻布だけで十分であった。その他のものは全てもっと冷たかったから。そして私が実行したほとんど全ての摂生治療は「神殿」の周りで行われたのだ。

(80) これらのことに類似したことだが、冬でもずっと裸足で歩き、また戸外やどこであろうとも神殿全体の至る所で、特に女神[17] の聖なる明かりの下

の、神殿に続く道で頻繁に夢見を行なった。私もまた肌着無しでシャツを着て、どれ位の日にちが経ったのかもわからなかった。さらに神がどれくらいの頻度で、この前か後のいずれかに、時にはエラエアで、時にはスミュルナで川や泉や海さえ利用して水浴治療するよう私に命じたか、またどのような情況下でこれらの各々が行われたかについて言うことはできない。

ここではペルガモンのアスクレピエイオンで行われた治療、摂生療法の他、泥浴や水浴治療のことについて述べられているが、患者（庇護嘆願者）は年中素足でかつ薄着で過ごし、聖域内の至る所で夢見によりアスクレピオスの指示を受け、治療に専念していた。時には厳寒の過酷な自然の中でも治療が実施されていた。特に治療の一環としてアスクレピオスの命による３回の水浴の実例が記されているが、ヒッポンへの道沿いの川での水浴治療に加え、行き帰りの雨降りも治療にカウントされている点が興味深い。また寒中の水浴を課す冷水での荒療法でも、肌から湯気が立ち上り、身体が紅潮して体温の上昇を図るなど人間が生来持っている自然治癒力（spontaneous cure）を活用しての治療で、行き過ぎれば命を落とす危険性は十分あるが、一方では科学的に人体機能を理解した治療行為ともいえる。

また泥治療の事例では、春分の中日と定められた日に、衆人環視の下で聖域内の神殿の近辺の聖なる井戸の傍らで患者集団が泥浴と水浴治療を行った。これも井戸の水がお湯のように感じられる寒さの中での荒療法で、いずれにせよ、命がけの治療であった。このようにアリスティデスによるAD ２世紀のアスクレピオスの聖域での具体的治療の情報は非常に貴重である。

⑷　ペルガモンでの治療―瀉血治療と薬草治療―

AD145年夏：　恐らく神が私たちに用いた水浴について語ることは理にかなっている。というのは、神は予言と共に最初から川での入浴を命じたからである。(46) 私はカタル（粘膜の炎症）と口蓋の苦痛を抱え、体中が悪寒と高熱で満ちていた。他の多くの種々の苦痛の中で、私の胃痛は最高潮であった。そ

して私は夏の間中家に籠った。以下のことが、ペルガモンの神殿管理者アスクレピアコスAsclepiacusの家で起った。(47) 私の記憶では、神はまず最初に、私の肘から60パイント（約34.2 l）の血を抜くように命じた。これはかなりの瀉血をしなければならなかったということだが、それは後からの夢見ではっきりしたことであった。というのは、当時の神殿管理人やその神の全ての崇拝者、その神殿で業務に携わっていた全ての人々は、イシュロンIschuronを除いて、そんなに多くの手術を行ったのは誰か全く知らなかったこと、また神の症例は未知の症例の１つであり、また間もなく行われる瀉血に付け加えられる他の未知の症例がなくても、私たちの症例はそれを凌駕していることに同意したからである。(48) １、２日後に神は再び私の額から血を抜くように私に命じた。神は診察してもらっていたローマの元老院議員の１人にも、私アリスティデスに指示したことと同じことを命じた。名家出身の彼の名前はセダティオスSedatiusで、彼自ら私にそのことを詳述した。瀉血の最中、神は私にカイカスCaicus川で水浴するよう命じた。そのために私はそこへ旅をし、毛織りの着衣を脱いで水浴しなければならなかった。神は、馬が水浴びをし、神殿管理人のアスクレピアコスが土手の上に立っているのを私が見るだろうと予言し、実際にそれは起った。(49) 川に近づくと馬が水浴しているのを見た。私が水浴している間、神殿管理人はそこに居合わせ、土手に立って私を見ていた。後から起る安楽や寛ぎは、神が理解することは容易いが、人間が理解したり書き記したりすることは少しも容易ではない。

AD146年冬： (30) 別の神殿管理人にフィラデルフォスPhiladelphusがいた。同じ夜、この男は夢幻を見、私もまたそうであったが、どうも内容は少し違っていた。私も多くのことを覚えているが、フィラデルフォスは、白い衣服を着、神の前に集められていた多数の群衆が聖なる劇場におり、彼らの間に私が立って公開の演説を行って神を讃えたこと、他の多くの出来事の中で、神が私の運命を防護するためにどれだけ多くの時間を費やしたかということ、神はニガヨモギ[18] を見つけ、私がそれに愛想を尽かさないように酢で薄めて飲むよう命じたのはつい最近であると私が語ったといったこと等を夢見した。また

彼はある聖なる梯子や神の臨場や神の素晴らしい力についても報告している。(31) フィラデルフォスはこれらの出来事を夢見た。しかし私には、以下のことが起った。私はその神殿のプロピュライアに立っている夢を見た。その神殿では浄めの儀式が挙行される時のように他の多くの人たちも集まっていた。彼らは白い衣服を着、その他の人たちも相応しい格好であった。神は人々の運命を割り振っているので、私は神を「運命の審判」と呼んだ。(32) というのは、いわば私が神に触れ、神がそこにいたと感じられたように思われた。私は夢うつつの境にいたようであるが、私が神を見る前に神が消え失せることに不安な気持ちで、目を開けようと努めた。また私はある時は夢のなかで、ある時は目覚めのなかで耳を澄ませ、聞こうと努めた。髪は真っ直ぐに立ち、私は喜びの涙を流し、私の心は神に逆らえないという考えで一杯になったのである。誰がこのようなことを言葉で書き記すことができるだろうか。もし誰かがそれを伝授されたなら、それを知り、理解するだろう。(34) 以上の夢見の後、夜が明けたので、私は医者のテオドトスTheodotusを呼び、彼が来ると私が見た夢を詳しく述べた。彼はそれらの夢がいかに神から授けられたものであるかに驚嘆したが、彼は何をすべきかについては当惑していた。というのは、今は冬季であり、私は長い月日の間ずっと室内に留まっていたから、私の身体の過度の虚弱を恐れたからである。(35) 私たちは神殿管理人アスクレピアコスを呼びにやることは悪い考えではないと思った。当時私は彼の家で生活していたことに加えて、多くの私の夢を彼と共有するのを常としていたからだ。当の神殿管理人がやって来た。私たちは会話する機会もなく、彼は私に次のように語った。「丁度今、私の仲間であるフィラデルフォスの所から来たところだ。彼自ら私を呼んだのだ。というのは、彼は夜、君に関わる素晴らしい幻夢を見たのだ」と。そしてアスクレピアコスはフィラデルフォスが見たことを詳しく語った。フィラデルフォスは私たちに呼び出されると、自ら再びそれを詳述した。夢が一致したので、私たちは医薬を用い、私は以前誰も飲んだことがないほどの量の薬を飲み、翌日も神が同じ合図を示したので、再び同じ処置をした。(36) 議論に戻れば、テーマが運命なので、神が私を悩ます多くの危険に直面してい

る私の処置をどのようにするかについて、また他の多くの神託が私たち２人[19]にと同じ方法で、以前またはこれ以後に発現する夢の中で啓示されるかについて議論した。

AD146年夏：（37）さて、その時期に関係する神託が結局どのようになるのかを付言して最初の話を終えよう。彼らは、この間ずっとアスクレピオス神は私の救済者であり、１日づつの命を私に与え、今でも私の救済者であるということを、またほんの僅かな私たちの情況さえ出来る限り知っていると理解している。しかし予言の時間が過ぎると、以下のことが起った。話は少し戻る。（38）偶々私が真夏に郊外にいた時、私の近隣のほぼ全ての地区に疫病の感染が広がった。最初に私の召使い２、３人が、それから次々に病気に罹った。そして老いも若きも全員が床に臥した。私も疫病に攻撃され続けた。医者たちが町からやって来たが、私たちは彼らの従者を召使いのように使った。私の世話をした幾人かの医者たちさえ召使いのようにその役を務めた。家畜もまた病気になった。もし誰かが移動させようとしたら、その者は戸口に行く前にすぐに死んだ。そこで情況を考慮すれば、もはや順調な航海などは不可能であった。そして全てが絶望と歎き悲しみと呻きとあらゆる種類の困難で満たされた。町の中は恐ろしい病気で満ちていた。（39）その間、私は自分自身の安全と同様に他の人の安全にも固執した。それから病気が増大し、私は昼も夜も絶えず私を悩ます胆汁の混交による恐ろしい炎症に攻撃されていた。私は食事を摂ることも出来ず、体力は衰弱した。そして医者たちは諦め、遂に完全に絶望し、私は直ぐに死ぬだろうと宣告した。しかしながらここでも神は「まだ彼の気性はしっかりしている」（*Il.*,XI, 813）というホメロスの成句を用いた。こうして私は自分自身が恰も他人であるように意識していた。そして私は臨死状態にまで至り、身体が死につつあることを認めた。（40）そのような情況で、私は偶々内壁側に向いてベッドで休んだ[20]。恰も夢の中にいるように思われたが、それは芝居の結末だったようにさえ感じられた。私は自分の編上げ靴を片付け、私の父の靴を取ろうとしたように思われた。まさにその時、救済者アスクレピオスは私を突然戸外に指し向けた。（41）それほど時間も経たないうちに、ア

テナ女神が盾と美貌とその威厳をもって、アテナイのアテナ・フィディアスAthena Phidiasの完全な姿で現れた。盾からは出来るだけの芳香を漂わせているが、それは蜜蝋のようであった。また美貌と偉大さにおいても素晴らしかった。アテナ女神は私にだけ現れ、私の前に立っていたので、私もできるだけその場から彼女を凝視した。私はまた女神に友人２人と私の乳姉妹を贈物として選び出した。私は、女神が私の前に立ち、私に語りかけたと言いながら叫び、彼女をアテナと名指しで呼び、そして盾を示した。彼らは、私の体力が回復し、私が神から聞いた言葉を彼らが知るまで自分たちが何をすべきか分からないし、当惑して、私が狂乱することを恐れた。そして私は以下の言葉を思い出す。(42) 女神は私に『オデュッセイア』(*Od.*, V) を思い出させ、これらは根拠のない話ではなく、現在の情況によってさえ判断されうると言った。辛抱しなければならなかった。実際私自身はオデュッセウスでもテレマコスでもあり、女神は私を助けに来たに違いない。私はこの種の他のことも聞いた。このように女神が現出し、私を慰めた。一方、私は病気で床に臥せ、死以外は何も望まなかった。(43) 直ちにアッティカ産の蜂蜜の浣腸が私に施され、胆汁質の浄化が行われた。この後薬と食物が運ばれた。全ての食物の拒否の後に食べたのが、最初はガチョウの肝臓、次いでソーセージだったと思う。それから私は長い、覆いのある乗り物で町に運ばれた。そして私は苦悩と困難を抱えながらも徐々に回復した。(44) しかしながら、最も大切な私の乳姉妹が死ぬまで熱が私から完全には抜けなかった。後で知ったのだが、私の病気が治癒した同じ日に彼女は死んだ。それで私が現在まで神からの賜物として命を長らえたのであり、私は神から新しい命を授けられた。言わばこの種の交換が行われたのである。

145年夏のカタルと口蓋の病気から胃痛が激化し、瀉血治療を行ったこと、146年冬の夢見による治療が述べられているが、ここでは神殿管理人フィラデルフォスが見たアリスティデスに関わる夢とアリスティデス本人の夢、それに基づき夜が明けてから医師とアスクレピアコスを交えての治療相談が行われ、

医薬による治療が実施された。また名門のローマ元老院議員もアスクレピオスから彼と同じ瀉血治療を受けるためにペルガモンを訪れており、当時のペルガモンの名声がローマにも届いていたことがわかる。さらに146年夏に町に蔓延し、自らも罹病した疫病についても詳細に記述している。医者にも見放されたアリスティデスが死の床にあって、アテナ女神に励まされ、蜂蜜の浣腸による治療が施され、彼自身は回復するが神への贈物とした乳姉妹は亡くなったエピソードも述べている。このような相次ぐ病いとそれに対するアスクレピオスによる聖域内外での多様な方法での治療が列挙されており、病気治癒に関する貴重な情報として興味深い。

お　わ　り　に

以上実際にペルガモンその他の場所でアリスティデスに施されたアスクレピオスによる治療祭儀と夢見に基づく治療についてみてきたが、アスクレピオスの指示するまま、たとえ体調不良であろうとも庇護嘆願者（患者）として、彼は場所、季節、時間を厭わず治療処置に出かけなければならなかった。神の恩寵によるとはいえ、何度も臨死状態に陥るような命がけの治療であったといえる。またアリスティデスは自らの治療体験を記述しているが、このような荒療治を13年半も続けたアリスティデスの体力と気力にも驚嘆せざるを得ない。現代の医学の立場から見て果たしてどのような評価が与えられるだろうか。

紙面が尽きたので、今後はアリスティデスの『聖なる教え』第２書以外の書のほか、アスクレピオス祭祀に関わる碑文や奉納碑文、カルテ石板等の史料を活用して、当時のペルガモンでのアスクレピオス祭儀の実態やアスクレピオス崇拝の国家祭祀化についても今後の課題として、稿を改めて検討したい。

註

１）P.Aelius Aristides, Charles A.Behr Translated into English, XLVII～LII THE SACRED TALES: Ⅰ～Ⅵ in *THE COMPLETE WORKS Vol Ⅱ*, Leiden-E.J.Brill, 1981, pp.278～352.; Aelius Aristide, Introduction et traduiction par A.J.Festugière, *DISCOURS SACRÉS, Réve, Religion, Médecine au Ⅱ^{e} Siècle après J.C.,* Macula, 1986

２）Aristides, Publius Aeliusの項：S.Hornblower & A.Spawforth eds., *THE OXFORD CLASSICAL DICTIONARY,* OXFORD UP,1996^{3}, pp.160～151.

３）Alexia Petsalis-Diomidis, *Truly Beyond Wonders Aelius Aristides and the Cult Asklepios,* Oxford UP, 2010, pp.123～124.; *http://en.wikipedia.org/wiki/Aelius_Aristides*

４）Behr, *op.cit*., pp.425, 445.

５）Petsalis-Diomidis, *op.cit*., p.150.

６）Behr, *op.cit*., pp.425, 428, 432, またFestugière, *op.cit*., pp.187～188は部分的に異なる区分けを示している。

７）Behr, *ibid*., p.431, n.101は、以前はAegaeとされていたが確かではないとし、エグナティアEgnatia街道（ローマ道）はDyrrachiumへの途中ここを通り、Edessaからそれほど遠くないAxius川沿いに大滝があったと指摘している。

８）『小学館ロベール仏和大辞典』小学館、1988年、thériaqueの項；（古医学で）テリアカ：解毒の特効薬と考えられたアヘンなどを含む舐剤.［ラテン語thēriaka, -cē ギリシア語thēriakḕ（antídosis）野獣の毒に対する解毒剤（thēriakós「野獣の」の女性形）］

９）Festugière, *op.cit*., p.143, n.117.　恐らくアリスティデスはオスティアで乗船したとし、ティレニア海はイタリア、コルシカ、サルディニア、シチリアの間に挟まれた海域としている。

10）Behr, *op.cit*., p.431, n.107 はRhionの近くとしている。

11）Festugière, *op.cit*., p.143 n.125. ここで示されている温泉は「アガメムノーンの浴場」としている。Cf.*H.L.*II. ５－７.

12）καθέδραは*"seat"*（椅子や職）の意味であるが、Behr, *op.cit*., p.432 n.115　はアリスティデスにとってこの言葉は特別の意味を持っており、彼の生涯でソフィスト職を目論んでいたこの時期だけに限定されて専ら使用されていると指摘している。

13）Behr, *ibid*., p.492は、L.Salvius Julianusは有名な法学者で、148年の正コンスルであるが、第三名の代わりに第二名（Julianusの代わりSalvius）を使用するのはアリスティデスでは異例のことであると指摘し、恐らくその名前に暗示されている「Salvus, 健康な」の概念からの使用としている。またここで「現コンスル」としないで「コンスルの１人」との解釈を提示し、これが正しければ、彼は170／171年にコンスル職にあった人物であり、そ

の時期に執筆したことになるが、彼を「現コンスル」と解釈すれば、それは別人のSalvius Julianusが正コンスルとなった175年に『聖なる教え』が執筆されたことになると解説している。

14）ペルガモンのアスクレピエイオンで治療棟あるいはテレスフォロス神殿と呼ばれている円形の建物（Rotunda）にその名前を留めている。高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年、171頁「テレスポロス」の項では医神アスクレピオスに従う子供の姿の神としているが、Behr, *ibid.,* p.429, n.21は、元来はアスクレピオスと関係のない神であるが、現在は彼の息子とされていると解釈している。拙稿「ペルガモンのアスクレピエイオン（１）」『愛媛大学法文学部論集』第31号、2011年３頁は、地元の半神テレスフォロス祭祀が先行して行われていたが、新参のアスクレピオスに癒しの神の役割とその地位を乗っ取られ、副次的地位に堕ちたとした。

15）Behr, *ibid.,* p.431, n.91.　Elaeaはペルガモンの外港としている。Festugière, *op.cit.,* p.144, n.140もここはペルガモン王国の港があり、アリスティデスのもう１つの冷水浴場があった場所としている。

16）Behr, *ibid.,* p.305はgrossy springsと訳し、Festugière, *ibid.,* p.65はdes fontains aux eaux vertesと訳している。

17）Behr.,*ibid*., p.144, n.142 アスクレピエイオンに続く聖なる道には、アスクレピオスの娘ヒュギエイア女神に捧げられた聖なるランプが灯されていた。

18）http://ja.wikipedia.org/wiki/ニガヨモギ：ニガヨモギ（学名：*Artemisia absinthium*）はキク科ヨモギ属の多年草あるいは亜潅木で、英名はwormwood、生薬名は苦艾（くがい）。楽園から追放された蛇が這った跡からこの植物が生えてきたという伝説に由来し、原産地はヨーロッパである。また葉、枝を健胃薬、駆虫薬として用い、干したものは袋に詰め衣類の防虫剤として使用されたと説明している。

19）Festugière, *op.cit.,* p.140, n.65 は、私たち２人とはアスクレピアコスとアリスティデスであるとしている。

20）Behr, *op.cit*., p.430, n.66は、アリスティデスのベッドは部屋の右側の壁に沿って置かれており、右側に向いて寝ていたが、それで肝臓を圧迫して虚偽の夢を見たのであり、彼が部屋の左手の外側に向って休んだら、偽りの夢も見なくなったと説明している。

＊青山学院大学文学部の阪本浩教授のご好意で英訳と仏訳のAristides、*Hieroi Logoi*（注１文献参照）を借用した。記して感謝したい。